

教育総合センター

NO. 150

だより

平成 30. 12. 1



「尼崎市内へ移転します!!」

尼崎養護学校(あまよう特別支援学校)
校長 小寺 英樹

今回、このような執筆のチャンスをいただきましたので、この機会に本校の紹介並びに市内移転のアピールをさせていただきます。

本校は、肢体不自由特別支援学校で、小学部・中学部・高等部が設置されており、小学1年生から高校3年生までの子どもたちが学んでいます。昭和33(1958)年に開校し、肢体不自由特別支援学校としては、全国で5番目、県下で2番目に設立された歴史ある学校で、今年度、創立60周年を迎えました。

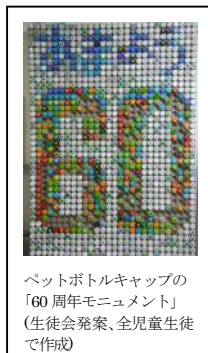
そして、この60周年という節目の平成30(2018)年12月末に、現在位置しています西宮市から尼崎市内へ移転(引越し)を行い、1月からは新校舎での生活が始まります。

場所は、旧梅香小学校の跡地(新住所:東難波町2丁目14番40号)です。

移転に伴って、学校名について市教育委員会が公募等を行い、新しい名称が決定しました。

『尼崎市立あまよう特別支援学校』

『あまよう』は、在校生や卒業生、その家族や関係者の方々に愛着をもたれている呼び方です。そして、ひらがなにすることでやわらかく温かいイメージになります。また、『あまよう』を㊦かるく㊧えをむいて㊨ろこび㊩まれるをキャッチフレーズに、これまでの歴史と伝統を大切にしながらも、新しい学校を創造していくという意味が込められています。



ペットボトルキャップの
「60周年モニュメント」
(生徒会発案、全児童生徒
で作成)

子どもを中心に据え、教職員・保護者と共に、より良い学校作りに取り組んで行かなければと感じています。

この市内移転は、尼崎養護学校の卒業生やその保護者をはじめ、これまで尼崎養護学校に関わって来られた多くの方々の願い、そして行政の方々や多くの支援者の皆様のおかげで実現に至りました。大変喜ばしいことで、感謝の気持ちでいっぱいです。

この大きな転機に在籍している子どもたちや保護者、そして勤務している教職員は、もちろん様々な負担もあります。しかし、歴史的な瞬間に立ち会える喜びを感じ、子どもたちが安心して新しい校舎での生活ができるよう、移転に向けて取り組んでいるところです。

そして何より、これまで出来なかった地域との関わりが可能になります。新しい場所で、周辺地域の方々から、学校を応援していただけるような「つながり」を創ることが大切であると考えています。

また、これまで以上に市内の特別支援教育のセンター的役割を担う必要性を感じています。

市内移転後も、学校目標である『一人ひとりの自立と社会参加をめざし、生きる力を育てる』を基盤に、卒業後を見据え、子どもたちが充実した学校生活や家庭生活が送れるよう、保護者・教職員が一体となって、地域や関係機関との連携を図っていきます。そして、子どもたちはもちろん、子どもたちを取り巻く全ての人たちが、「あたたかく、自然に笑顔があふれる学校」を目指していきます。

教師が与える課題から子どもが考えたい問題へ ～算数科教育アクティブ・ラーニング部会に参加して～

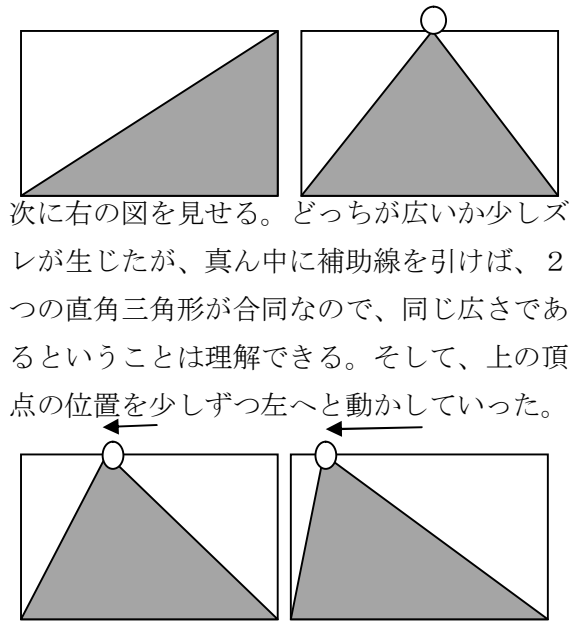
1 問題を見いだすとは・・・

④ 「○+○の計算の仕方を考えよう」、
⑤ 「～のきまりを見つけよう」と算数のスタートは決まって、こういったセリフで始まる。子どもは見通しをもてるかもしれない。しかし、見方を変えれば、今日の学習展開が丸見えの状態である。「コインがこっちに移動するので、見てみよう」と手品をする前に公表するマジシャンはいない。無言でコインを見せ、パッと消えてコインが移動する。だから観衆は、おお！と驚き、なぜ？どうやって？と不思議がり、もう一度見たい！と前のめりになるのである。私は、算数科においてもそういった子どもから問いが生まれるような仕掛けをまいてスタートしたいと考える。

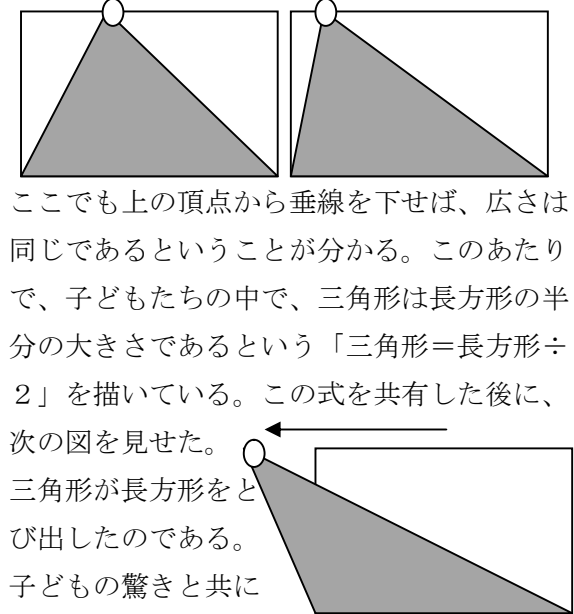
小学校学習指導要領解説 算数編では、数学的活動を『事象を数理的に捉えて、数学の問題を見だし、問題を自立的、協同的に解決する過程を遂行すること』と位置付けている。教師が与えた課題を解くのではなく、あくまで子どもが数学の問題を見だすことが条件となる。つまり、⑤は、子どもから生まれたものであり、子どもにとって目的意識や必要感のあるものでなくてはならない。教師は子どもが問題を見だしたくなるように意図的に仕組んでいく必要がある。AL算数部会では、その仕掛けの視点の一つにズレを子どもに自覚させることを大切にしている。友だちとのズレ、予想とのズレ、感覚とのズレ、既習とのズレがそうである。

2 ズレを引き出す実践例

例えば、5年生の三角形の面積の学習では、「どっちが広いかな？」と問い、以下の図を見せた。左の図は、対角線で分かれているため、広さは同じであるということは分かる。



次に右の図を見せる。どっちが広いかな少しズレが生じたが、真ん中に補助線を引けば、2つの直角三角形が合同なので、同じ広さであるということは理解できる。そして、上の頂点の位置を少しずつ左へと動かしていった。



ここでも上の頂点から垂線を下せば、広さは同じであるということが分かる。このあたりで、子どもたちの中で、三角形は長方形の半分の大きさであるという「三角形＝長方形÷2」を描いている。この式を共有した後に、次の図を見せた。三角形が長方形をど

び出したのである。子どもの驚きと共に「大きい」「同じ」と言葉がとびかった。つまり、友だちとズレ、前図で描いた式とのズレなどが生じたのである。「どれだけ出たの？」「まっすぐ出たんだよね？」と子どもたちの言葉の解釈を共有し、とび出た三角形でも同じ広さかな？とめあてが生まれたのである。

3 これからの部会の方向性

問いが生まれる導入のあり方を模索することから始まったAL算数部会がスタートし、3年目となる。今では、問題を見いだした後、どのように子どもに寄り添って展開し、新たな問いや見方の発見につなげていくのかといった、問題を解決する過程の中でのあり方について研究をしているところである。

(武庫小学校教諭 山本 正貴)

☆☆ 日々の実践こそが ☆☆

特別支援教育担当をしていた昨年までの二年間、幾度となく小学校の授業を見る機会があった。

その度に先生と子ども、子ども同士の関わりに温かい気持ちにさせられた。先生が子どもに寄り添いながら支援・指導する姿、その受容力と優しい声かけ。授業の中で、発表したAくん「すごい」と声をかけるBさん。照れくさそうにはあるが、直ぐに「ありがとう」と笑いながら返すAくん。

自分の思いを友達に素直に伝えられる、優しさに満ち溢れた、そんな空間を何度も目の当たりにしてきた。

今年度、人権教育担当となって、様々な人権課題をテーマとした30編ほどの中学生の作文を読む機会があった。「信号待ちで視覚障害者に遭遇した時の心の葛藤、これからの自分の行動」「子どもへの虐待について思うこと」など、それらの作文の中には、人権に対する高い意識、強い気持ち、人に対する優しい想いなどが、素直に、そして力強く書かれており、その内容の深さに驚かされた。それと同時に、学校現場の人権意識・指導力の高さを感じた。そこでは、生徒が一人一人の人権を尊重し、誠実に自分の生き方を考えているからこそ、素晴らしい作品に繋がっているのだろう。

今年度は、人権作文コンテストに市内中学生8,052人が作品を応募している。

人権教育においても道徳教育においても、授業はもとより、「日々の教育活動全体の中で行う」とされている。ただ、最近の子どもたちは、スマートフォンやSNSなどの普及により、人と直接コミュニケーションをとる機会が少なくなり、「人間関係づくりが上手にできない」、便利さや手軽さに慣れ、「物事をじっくり考えたり、自分の将来を考えたりしない」とも言われている。

このような時代だからこそ、人と人との直接関わり合う学校現場の重要性を感じる。先に述べた小・中学校での取組にもあるように、学校生活では、子ども達一人一人が、自尊感情を高め、人に対して温かい優しい気持ちを持ちながら、さらなる高みを目指して、先生と共に歩み進んでいく事が大切である。この学校現場での日々の実践こそが、道徳性を育み、人権意識を高めるための大きな力となる。

人権・道徳教育の根底にあるものは、大人も子どもも、直接関わり合いながら喜怒哀楽を共にし、人として共に成長することではないだろうか。

12月8日（土）に、尼崎市教育・障害福祉センター4Fの視聴覚室で「人権週間のつどい」が開催され、その中で、市内最優秀作品3編の朗読会も行われる。

自分の思いを発表する今回の朗読会、一人でも多くの方に聞いていただきたい。

（人権教育担当係長 上村 知一郎）



教育情報コーナーのお知らせ

☆教育情報コーナーのご案内

教育情報コーナーでは、先生方に利用していただきたい本や資料、雑誌等を整備しています。教育総合センターでの研修や会議の時など、ぜひお気軽にお立ち寄りください。（3F 教育情報コーナー-mini）

また、必要な図書、資料等のご相談にも応じております。お気軽にお尋ねください。

【算数・数学に関する図書】

- 『授業改革の二大論点 算数の活動・算数の活用』 全国算数授業研究会 編／東洋館出版社
- 『算数科 深い学びを実現させる理論と実践』 金本良通・赤井利行・池野正晴・黒崎東洋郎 編著／東洋館出版社
- 『小学校 新学習指導要領 算数の授業づくり』 尾崎正彦 著／明治図書
- 『必ず身につけたい算数指導の基礎・基本55—資質・能力を育む授業を実現するための方法—』 山本良和 著／明治図書
- 『通常学級で役立つ算数障害の理解と指導法』 熊谷恵子・山本ゆう 著／学研教育みらい
- 『「予想」で変わる数学の授業』 相馬一彦 編著／明治図書
- 『理論×実践で追及する！ 数学の「よい授業」』 相馬一彦・國宗 進・二宮裕之 編著／明治図書
- 『「単元を貫く数学的活動」でつくる中学校数学の新授業プラン』 藤原大樹 著／明治図書
- 『中学校新学習指導要領 数学的活動の授業デザイン』 永田潤一郎 編著／明治図書



【その他の新着図書】

- 『子育てで一番大切なこと 愛着形成と発達障害』 杉山登志郎 著／講談社
- 『2030年 教師の仕事はこう変わる！』 西川 純 著／学陽書房
- 『タテマエ抜き教育論 教育を、現場から本気で変えよう！』 木村泰子・菊池省三 著／小学館
- 『学級担任のための残業ゼロの仕事のルール』 庄子寛之 著／明治図書
- 『専手必笑！インクルーシブ教育の基礎・基本と学級づくり・授業づくり』 関田聖和 著／黎明書房
(担当 松浦)

☆教育総合センターは、知の宝石箱！ 「ひと咲きタワー」は、教職員の学びのタワー！

【本の紹介】 ※『対話的に学び「きく」力が育つ国語の授業』

(明治図書 2018年8月初版 第1刷刊 監修者 益地憲一 編著者 国語教育実践理論研究会)

監修者 益地憲一先生は、元関西学院大学教育学部教授。信州大学教育学部教授等を歴任。

『「話す」と「聞く」は「対話」の両輪。「聞くこと」に正面から取り組んだ研究や実践があまり多くなかった』とし、対話的な学びを支える「きく」能力の育成を目指して、【能動的に「きく」こと的能力表】を提案されている。縦軸に「つかむ」「ひきだす」「はこぶ」「うみだす」の四つの「きく」ことの能動的機能を置き、横軸に「情意」「技能」「認知」の対話能力の三要素を据えたマトリックス。「きく」の三態として「聞く」「聴く」「訊く」と書き分け、能力表に基づき授業プランを紹介されている。その二つの実践例。

▼尼崎市立浜小学校教諭 宮城 久雄 第2章「つかむ」2

『低学年におけるきいてメモをとる力—「ともこさんはどこかな」の実践から—』 (小学2年)

▼神戸大学附属小学校教諭 友永 達也 (元尼崎市立水堂小学校教諭) 第2章「はこぶ」9

『モニタリングで育むメタ対話意識と「応じる力」』 (小学2年)

※兵庫教育10月号 2018 No.812号 (発行：兵庫県教育委員会 編集：兵庫県立教育研修所)

『中堅教員等による随想 算数が苦手な子のための文章題の解き方』 尼崎市立水堂小学校教諭 坂本 肇

※兵庫教育11月号 2018 No.813号 (発行：兵庫県教育委員会 編集：兵庫県立教育研修所)

『取組は、今年10年目～外国語を通じてコミュニケーションを楽しむ子どもの育成～』

尼崎市立園田東小学校長 大濱洋治 ※尼崎の先生方が執筆しています。

教育総合センターには、すてきな本がたくさんあります。

(担当 谷口)